
みいーつけた・・・

Harune

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みいーつけた・・・

【Nコード】

N79520

【作者名】

Harune

【あらすじ】

仲良しグループの浩たち6人はネットにあった都市伝説のかくれんぼを好奇心で始めた。イジメにあった有里奈さん。かくれんぼに誘われ、捜している途中に事故死する。復讐のために参加する有里奈さんは見つけた人を次々に金属バッドで殺していく…

プロローグ（前書き）

こんばんはー（o´・ω´・o）ノ、

キャスファイ!というサイトで書いてた小説をちょっと直して投稿していきます。

ホラーというわりにはあんまり怖くないんですけどね；

私に小説をかくというスキルがなさすぎるから…

オラにスキルをわけてくr（強制終了

ではー

プロローグ

・・・・・・・・登場人物・・・・・・・・

●岡田 浩オカダ コウ

●鈴木 加奈スズキ カナ

●海藤 学カイドウ マナブ

●平野 結衣ヒラノ ユイ

●今井 勇イマイ ユウ

●三村 猛ミムラ タケシ

・・・・・・・・プロローグ・・・・・・・・

「ねえ、知ってる？ 『有里奈』 っていう女の子の話」

「誰それ？ 知らない」

「その有里奈さんは小学校のときにイジメにあってて、ある日同じクラスの人たちに

『かくれんぼしよう？』 って声をかけられたの、有里奈さんは友達がいなかったから

嬉しくて『いいよ』 って答えたんだって。それからかくれんぼしてたら

有里奈さんが鬼になっちゃったの鬼はもちろん目を閉じて数を数えるじゃん。

その間に同じクラスの子達はわざとみんな帰っちゃったの。有里奈さんは

暗くなってもずっと探してたんだって。

ずっと探しても見つからなかったから諦めて公園を出たときに一台のトラックにひかれて、亡くなっちゃったんだ」

「かわいそぉ〜」

「だよねえ・・・ここまでは本当なんだ。これからは噂だから本当かどうかは知らないんだけど：

5人以上で手をつないで円を作るんだ

そうしたら、みんなで声を合わせて

『有里奈さん有里奈さんかくれんぼしよう』って 3回繰り返す

そうしたら、どこからか分からないけど、『いいよ』っていう声が聞こえるの

そしたら『じゃあ私が鬼ね』ってまた声が聞こえるのそれでゲームスタート

その有里奈さんは昔一緒にかくれんぼをやっていた

クラスの子たちに復讐するためにかくれんぼをやるんだって

だから有里奈さんは金属バッドを持って探すらしいの

それで見つかった人は次々にその金属バッドで殺されていくんだって…」

プロローグ（後書き）

最後まで読んでくださりありがとうございましたOYZ

結構早いペースで更新していきますのでよろしくお願いします／＼

第一話（前書き）

こんばんはー

さっきブログ投稿したばかりですがW

ではどうぞー

第一話

俺たちは『都市伝説研究会』仲良し6人組で作ったのだ

今日は面白い都市伝説を見つけて調査しよう！と言うことなのだが…

「なかなかいいのが見つからねえ…」頬杖をつきながらボソッとつぶやいた

俺【岡田 浩】は諦めて「もうそろそろ帰らねえか？」と聞こうとした時

学が「コレ面白そうじゃない？」と言った

みんなは学の所に集まった

『有里奈さん』と書かれた題名

一通り読んでみると少々怖いかもしれない

「コレやるの…？」と結衣が嫌そうに言った

「ぷっ…結衣ってもしかして信じてるの？こんな作り話」勇が笑う

「そうそう。まずお化けが一緒にかくれんぼするとか不可能だし！」
勇も続けて笑う

「そ、そんなに笑わなくてもいいじゃん!!!!」

結衣は顔を真っ赤にして怒っている

「ちょっと結衣をバカにしないでよっ!」加奈も怒った

「ほら喧嘩するなよ…」って俺が注意しているのに誰も聞いちゃいない

「まあ、この都市伝説に出てくる“有里奈さん”は 実在していたらしいんだけどね」と学が笑う

するとまるで一時停止をしたようにみんなの動きが止まった

「え…? マジかよ」俺は聞くと

「うん。だってホラ」学はニコニコしながら画面を指差して

「僕はちょっとやってみたいかも」と言った

「…やるか?」俺が聞くと学と猛と勇は賛成したが結衣と加奈は反対だった

しかし多数決的には結衣と加奈には悪いが【賛成】

6人でスケジュール帳を広げながら日程を決めた

「明日の午後2時に鈴蘭公園に集合な!!!」
すずらん

第一話（後書き）

第一話でしたー…

なんかここまで怖くないんですよ全然w

全体的に怖くはないんですけどね！小説書くの下手だから！！↑

やっぱり地球の皆、オラにスキルをわけて（黙

第二話（前書き）

こんばんはーHaruneです

実はテスト前なんでパソコンしちゃダメだなーって思ってるんですけど

やっちゃったもんは仕方がないんで、更新しちゃえ☆

的な（・ω・）

では、第二話です

第二話

俺は帰り道、明日のことを考えていた

もしあの噂が本当だったら俺達は殺されてしまうのか？

というより「かくれんぼ」はいつまで続くのだろう

次の日まで？一週間？一ヶ月？もしかして一生？

噂ごときでここまで考える自分が情けない

疲れているのかもしれない

今日は早く寝よう

俺は鈴蘭公園に行った

集合は2時だというのに学与結衣が待っていた

「おぉー早いな」と笑って言う

「まあ暇だし」と本を読みながら学が答えた

2時になると加奈が来た

「あれ猛は？カップルで来ると思ってたのに」と、口を尖らせて結衣が言った

加奈と猛は中3の頃から付き合っている

「なんかいちいち待ち合わせしてたら遅れそうだし、面倒くさいから1人で来た」

噂をしていると猛が来た「5分の遅刻ー！罰金だぜ」と俺が言うのと罰金って遅刻15分からだろ？浩が決めたんじゃないか」と言われた

「うお…そうだったけ？」

そのとき、学が「チッ」と軽く舌打ちをした

「ええ…」と俺たちは学を見たが、

学はまるで何も無かったかのように本を読んでいる

「……………っ遅い！！」集合時間の2時から25分が経ったところに勇が来た

「おー！みんな早いねー」と25分も遅れたわりには焦らずのん気である

「勇、罰金5万円だよ」結衣と学が声を揃えて言った

時々こいつらの腹黒さは本気で怖い…

「ごめんごめんっ…頼む許して!!」

「んー…結衣どうする?」学が聞くと

「土下座」

「……え?」

「土下座しろって言ってんだよ」

笑顔だ…天使…いや女神の微笑とも言えるキレイな笑顔だ

しかし顔とセリフのギャップが…

土下座をする勇。

それをにこにこ見下ろす結衣。

そして勇の土下座姿を携帯で撮る学。

なんだこの図は…

こんなことをしている内にもう3時早いなあ

「そろそろやろうぜ?」

えーっと。確か最初は手をつないで円を作るんだったな

そして

「みんな覚えてるよな？」みんなはうなずいた

せーの

『有里奈さん有里奈さんかくれんぼしよう』

『有里奈さん有里奈さんかくれんぼしよう』

『有里奈さん有里奈さんかくれんぼしよう』

………？何も起こらない

返事もないし、俺たち6人以外公園にはだれもいない

「あはは、やっぱガセネタだったかぁー」

「ねえー暇だし勇のおごりでカラオケ行かない？」

みんな口々に言い出した

『…はあい』

「………なっ!？」

今聞こえた!! みんなうるさいのにはっきりと女の子に声で返事が聞こえた

「なあ! 今聞こえたか!？」俺が聞くと結衣と猛には聞こえたらしい

結衣はすごくおびえていて、今にも泣き出しそうだ

暑くないのに猛の額から汗が垂れている…

『…じゃあ私が鬼ね』

今度はすぐ近くで聞こえた

勇と加奈と学は驚いて周りを見渡している

猛は指を差している。その指はかすかに震えている

その先を見ると小学生ぐらいの女の子が木に手を当てて数を数えている

その隣には金属バッドが…

「あ…あれが有里奈さん!？」

俺たちはは急いで公園を出た

第二話（後書き）

長いですねー第二話って（・ω・）；

ここまで読んでくださった方々ありがとうございますOYZ
そしてお疲れ様ですOYZ

ではー、これから第三話も投稿したいと思います

第三話（前書き）

第二話投稿したばかりですが、調子こいてまた書きますW W
テスト終わるまでのしばらくは投稿出来そうにないんで、
、
）

第三話

俺たち6人はは走って公園から離れたビルとビルの間の細い通路に入った

「はぁ…はぁ…」走ったからなのか怖いからなのかすごく鼓動が早い

「どうする…？」学が聞くと

「まずは6人で行動して、やばくなったら2人ずつに分かれる」俺がそう言う

「分かった」とみんなうなずいた

ついでにペアは、学と結衣・俺と勇・加奈と猛

全員携帯は持ってきていていつでも連絡が取れるからとりあえず安心だ

そんなことをしているうちに

道のほうから金属を引きずる音が聞こえた

息を殺して道の方を見ていると女の子が1人、金属バッドを持って歩いている

「有里奈さん…だ」結衣が震えている

有里奈さんは俺たちに気づかなかったのか通り過ぎて行った

しばらくして俺は道路に少し顔を出し、有里奈さんがいないことを確かめた

「よし、いないぞ」俺の合図で道に出た

見つかって走るときのために体力を残しておかなければいけないので歩いて逃げた

歩いていると反対側の歩道に有里奈さんがいた

「逃げよう!!」みんなは走り始めた

俺はチラッと確認すると有里奈さんとはかなり離れている

だが、有里奈さんが『ニタァ』と笑っているのがしっかりと見えた

「有里奈さんは今俺たちが逃げているの分かってる!!」

俺たちは急いで走った

でも人が多くてなかなか前に進めない。それに6人だと余計に大変だ

「なあ、さっき決めたペアに分かれないか!？」

「そうだな、それじゃあ何かあったらすぐ携帯にかける!!」

俺たちは2人ずつに分かれてバラバラに走った

俺は勇とペアなのだが…なんで…なんで…

俺だけ男同士なんだよーっ!？」
「ついでに残りは猛と加奈・学与結衣」

はあ…って今は逃げなきゃ…

「ここからは俺の家が近いから一回家に避難しよう」俺は勇に言った

家に着くと俺たちは玄関に倒れこんだ

「はあ…はあ…」

10分程休んだ後、勇とこれからどうするかを話し合った

「誰かに電話かけてみれば？」

「そうだな」

俺はまず結衣と行動している学に電話をかけた

「学!?! あ、俺! 岡田だけど!?!」

「浩? どうしたの?」

「お前ら大丈夫か!?!」

「僕達は大丈夫だよ。今はコンビニで休憩中」

「そうか…よかった…俺らは今俺の家にいるから、もしよければ来いよ」

「うん。結衣が結構しんどそうだからしばらくしてからそっちに行くよ」

「分かった、気をつけてな！」

「うん。じゃあまた後で」

電話を切ってから俺は勇に言った

「学と結衣は大丈夫そうだ、今からこっちに來るって」

「そっか。よかったー！次は猛と加奈だね」

猛に電話をかけた

「……あれ？出ない」

「どうせ猛のことだから、マナーモードにしたままとか！」

「そうかもな」2人で笑った

「じゃあ加奈にかけてみろよ」加奈にかける

「……加奈も出ない」

「もしかして見つかったちゃった…とか？」

動いてないのにだんだんと心臓の鼓動が早くなって

冷たい汗がツーツと首筋を流れた

第三話（後書き）

連続で無駄に長いですずびばぜん（旦那）

ああああああ腰が痛い（旦那）

ではーしばらく更新できないです（ω・ω）
もしかしたらコッソリとパソコンつけて更新するかもですg（

第四話（前書き）

なんか結局更新してんじゃねえかとか言わないでくろさい（

ではでは、第四話ですー（＊、ω、＊）

第四話

「2人とも出ない……」携帯を持っている腕が震える

その時ピーンポーンとチャイムが鳴った

いきなりの音に心拍数が上がる

もしかしたら有里奈さんかもしれないと思いインターホンを見た

そこには学与結衣がいた。

俺は急いで玄関を開けて中に入ってもらい、猛と加奈が電話に出ないということを話した

「どうしよう……」

学の服の袖をつかんで泣いている

「結衣が落ち着いたら2人を探しに行こう」学が結衣の頭をよしよしとなでながら言った

結衣が落ち着くまでと言ったが学も俺も落ち着いてなかった

5分ほどたった結衣は泣きやんだ

「それじゃあ行こう」珍しく勇が仕切った

親友の猛のことが心配なのだろう

俺が玄関を開けて近くに有里奈さんがいないかを確認め外に出た
しばらく歩いて、隠れていそうな狭い通路も見たがいなかった

その時に急に音楽が流れた

4人は自分の携帯かとも思い確認したが違った

「あ！この曲：加奈の着信音と一緒！」

加奈の携帯を急いで捜した

「あった！！！」

勇が派手なピンクでジャラジャラと大量のキーホルダーの付いた携帯を上になっている

狭い路地の室外機のそばに隠れていたらしい

「…加奈のだね…なんかロック掛かってる…」勇は携帯を開けた

「ちょっと勇くん、貸してくれる！？…えっと…確か…」

結衣は勇から携帯をとるとパスワードを打ち始めた

「よし、ロック解除できたよ」

着信履歴を見ると猛からの履歴でいっぱいだった

さっきかけた俺の履歴も入っているが9割が猛だ

メールも届いていた。さっきの着信はメールだったのだろう

『加奈 今どこにいるんだ!? 俺は〇〇ビルの前にいるから
ぐに来て』

このメールからしておそらく2人ははぐれたらしい

「〇〇ビルか：行こう」勇は加奈の携帯を閉じて走り始めた

〇〇ビルの前で周りを見渡している猛がいた

「あ!!!お前ら!加奈に会った!?!」

猛はすごく不安そうな顔をしている。汗でビショビショだった。

「会ってない：さっき加奈の携帯を拾った：」

勇が猛に渡すと猛は携帯を握りしめた

いつからはぐれたのかを聞くと

6人から2人に分かれたときにはいた

でも、しばらくして有里奈さんに見つかった

逃げていたが気づいた時にはもう加奈は居なかったらしい

「探しに行くか？」俺が聞くと猛は「当たり前だろ」そう言った

「…猛とはぐれた…携帯もどっかで落としたし…もう最悪」

その頃、加奈は1人で歩道橋を歩いていた

高いところからなら見つけれられるかもしれないと思い下を見ると

有里奈さんが笑いながらこちらを見上げていることに気づいた

「やばっ!!」加奈は急いで階段を駆け下りた

有里奈さんは思ったよりも早かった

さすがお化け。スーツと歩いているようなのだが、やたらと速い

「…っもお!」少しスピードを上げて有里奈さんから距離を離して細い路地に入った

「はぁ…はぁ…」

しばらくしても有里奈さんは来ない。

やった逃げ切った。そう思い立ち上がってまた歩き始めた時に

「みいーつけた」

クスクスと笑う女の子の音がすぐ後ろで聞こえた

後ろを振り返ると ニタァ と笑う女の子が1人、自分のすぐ後ろでバッドを振り上げている

「イヤァァァァァ」 細い路地に女性の高い悲鳴がよく響いた

その瞬間“ドゴッ” 鈍器で頭蓋骨を叩き割る音がした

その後も有里奈さんは何回も何回もバッドで加奈を殴った

「後5人…」

第四話（後書き）

あははっははー…1人目です。はい。

こんな感じです。怖くないですy!!

ではー(o・ω・o)ノゝ

第五話（前書き）

テスト終わったよ！！

結果も終わってたよ！わっしょい！！！！↑

ではでは、第五話ですー

第五話

「加奈…いないな…」合流して5人で捜し始めてからもう1時間は経っているだろう

俺は反対側の道路のビルとビルの間の路地の前に人だかりが出来ているのに気づいた

パトカーも止まっている

事故か？それとも事件？

何か嫌な予感がした

「向こうの人だかりのところにこう…」そう言って俺は走った

着いたのはいいが人が多くてよく見えない

その時

『高校生ぐらいの女の子が殺されたんだってさ…鉄パイプみたいなもので

顔が分からないぐらいに殴られて死んでたらしいよー』

「……!？」

近くの人の話し声が聞こえた

「高校生」「女」「鉄パイプの様なもの」「死」

俺は周りの人を押しのけて現場に行った

「一般人が入っちゃダメだ！」警察に腕をつかまれたが振り払い、奥へと走った

「き、君！戻りなさい！！」そう言われたが無視してビニールシートを少し剥がした

顔（と思われる場所）はグチャグチャになっており原型を留めていない

「うっ……」吐き気がこみ上げる

でもコレが誰なのかを知りたかった。加奈じゃないことを祈った

俺は震える手でゆっくりビニールシートを剥がす

祈りは届かなかった

今日の加奈の服装と全く同じだった

「…あ…あ…か……っな…？」

声が上手く出ない

「浩?……!?!」学たちが後ろから来た

「…ち、違うよね? 加奈じゃないよね? ねえ…誰か違うって言うよ!?!…違う…って…!!!」

結衣が俺の隣にしゃがみこんで泣いている

「加奈…ごめんな…あの時に『一生守る』って約束したのに……」

猛は小さくごめんなと繰り返し呟いている

「…もう戻らないか……?」

猛と結衣は立ち上がり、みんな現場から出た

「俺の家に来るか?」俺が聞くと学は黙ってうなずいた

家に着いても誰も話さない

重い空気と時間だけが流れていく

「な…なあ、やっぱ2人組み行動は止めないか? はぐれても気づかないし…」猛が言う

「そうだな…これ以上犠牲を出したくないし」

これからは5人で行動することにした

外はだいぶ暗くなった

歩きで帰るのは危ないという学の意見で

タクシーを呼んで、全員家まで送ってもらった

みんな帰った後、俺は1人考えていた

本当に有里奈さんは人を殺してくる…いつまで続くんだ…

加奈は…加奈はもう戻ってこないんだな

急に涙が頬をつたった

この年になって情けねえ…そう思ったが涙は止まらなかった

第五話（後書き）

最近寒くて手がかじかんで上手くキーボードが打てないですorz

結構誤字脱字多そうな気が：するけどそこはスルーでお願いします
！
↑

なんかこのメンバーで恋愛が書きたいと思ったけどやめる（（

第六話（前書き）

寒いっす↑

こたつに入りたいーぬくぬくしたいーorz

お母さんに「今年も前みたいにこたつ出してー」って言ったら
「こたつ出したらみんな出てこうへんようになるやん」

ごもっともなご意見ありがとうございます

そんなこんなで第六話（え

第六話

今日は9時に学の家集合…なのだが時計はもう9時10分をまわっている

「やっべ…」俺〔勇〕は急いで準備をし、玄関を開けようとしたとき

「あ、タクシー乗らなきゃダメなんだっけ」学の言いつけを思い出した

携帯でタクシー会社に電話してタクシーの到着を待った

5分後『ピーンポーン』チャイムが鳴った

「早っ！」まあ、遅れたら罰金とられるからいいやと思い玄関を開けた

そこにはタクシー会社の人…ではなく有里奈さんがいた

「なっ!？」有里奈さんは金属バッドを振り上げる

“バンッ!”俺は急いでドアを閉めた

「あつぶねー」ギリギリでドアを閉めたので当たらなかったが、少しドアがへこんだ

「ああドアが…大家さんに怒られる…けど命が助かったただけまだマシか」

しばらくしても何も起こらない

インターホンを見るが誰もいない

恐る恐る玄関を開けたがやはり誰もいない

「おっ！勇くん撃退成功！！」

「タクシー来るまで暇だな…何か聴こうかな…」俺はCDの山を崩し始めた

「あ、久々にコレ聴こう」一枚のCDをかけて、雑誌を読み始める

「ん？」後ろに誰がいる…気がする

そっと振り向いたが誰もいない

まあいいやと前を向くと有里奈さんがいた

「えっ!？」驚いた瞬間有里奈さんが笑った

『みいーつけた』

“ガンッ”振り下ろしたバッドが勇の頭に直撃した

頭から血が溢れるように噴き出す

『後4人……』

「今日は学の家」に9時集合だったな」俺〔浩〕はタクシーで学の家へと向かった

『ピンポン』チャイムを押すといきなりドアが開いた

「うわお！」俺は驚いて一歩後ろへ下がった

結衣と猛がゲラゲラと大笑いしている

「そ、そんなに笑うなよ！…恥ずかしいじゃねえか」と俺が言うと

「だって…だって、浩『うわお』ってあはははは」まだ笑ってる

「ほら浩、入りなよ。結衣も猛も浩の邪魔だからはい、入って入って」

学はまだ笑ってる2人を引っ張った

良かった。加奈が死んでから2人とも笑わなくなったから…

「あれ？勇はまだ来てないのか？」

「うん。まだ来てないよ」

「あ！これ…」猛が新聞の記事を指差した

【女子高生 金属バッドで複数回殴られ死亡】

「…加奈の事だよね」結衣はポツンと呟いた

「犯人は…有里奈さんだよな……あ…て、ていうかさ！勇遅くない！？」

結衣が泣きそうな顔をしているそれを見た猛は無理やり話をそらした

「9時に集合なのに25分も遅刻してる」学はため息をついた

「なあ！10時になって来なかったら今日のタクシー代勇に払ってもらうってのはどうだ？」

俺はニヤニヤしながら言うと言が「浩、ナイスアイデア！！」と俺の肩を叩いた

それから4人でゲームをして勇が来るのを待つことにした

ふと時計を見ると10時を過ぎている

「おお！勇のおごり決定だな！！」猛は嬉しそうに言った

「でも遅すぎない？」

「んじやさ、勇の家に行ってみる？どうせ勇がタクシー代払うんだし」

ということで勇の家に行くことになった

『ピンポーン』 勇は出ない

『ピンポンピンポンピンポンピンポン』 ちょっと連打してみた

「あんたら何してんの!! その年でピンポンダッシュかい?! みつともない…」

勇のアパートの大家さんだ

一度勇の家に遊びに行ったときに見たことがある

「勇…今井が出てこないんです」

「え? 出かけてるんじゃないの?」 大家さんは少しイラっている

「そうなのかな?」 俺は玄関を開けようとしたが鍵が閉まっている

入れ違いになったのだろうか

「でも少しだけ音楽聞こえるよ」 ドアに耳をあて、結衣が言う

確かにかすかではあるが音楽が聞こえる

ドア横の鉄格子がはまっている小さな窓を開けた

「あ！…あいつ…寝てやがる」

「ええー？」 猛と結衣が声をそろえた

「大家さん、鍵開けてもらえませんか？」 結衣が困った顔で言うと

「仕方がないねえ…」 そう言って鍵をあけた

俺はドアを開けた

「勇！？」

勇は寝ていたのではなく死んでいたのだ

頭から大量の血を流して

「おい！しっかりしろ！！」 俺は勇の体をかかえ起こした

「やだ…やだよ…」 結衣は頭をかかえる

大家さんが警察と救急車を呼んでくれた

警察に詳しいことを話した

有里奈さん…かくれんぼのこと以外は……

その時

『後4人……』

辺りを見渡したが有里奈さんはいない

「お、おい！！今の聞こえたか！？」学に聞いた

「…何が？」

なんで聞こえてねえんだよ

「結衣は！？猛は聞こえたか？」

しかし2人とも聞こえてなかったらしい

首を横に振っている

後4人 ってどういうことだよ

もしかして後4人殺すってことなのか？

俺の質問に答えるかのような不気味な笑い声が聞こえた

第六話（後書き）

こんなペースで大丈夫か

大丈夫だ、問題大有り r y

7話を投稿しようかしらどうしようかしら

第七話（前書き）

お久しぶりですね!!

何事も無かったかのように更新しますよ^q^てへ

第七話

「後4人…か…」俺はベッドの上で考えていた

あの時に聞こえた有里奈さんの声が頭から離れないし

寝ようと思って目をつぶると加奈と勇の顔がまぶたの裏に映って寝られない

「俺のせいだよな」

そもそもこんなサークル作らなければ…

何もしていない加奈と勇が殺されずに済んだんだ

学と結衣と猛だってこんな危険なことに遭わなかったし

全部俺のせいだ

何もかも全部

俺のせい

「いめんな…っ」

外が明るい　いつの間にか寝ていたらしい

今日はどうするんだっけ？

学に電話した

「浩、どうしたの？」

「いや、今日どうすんのかな？　って思っ

「んー…まだ決めてないや。そうだな…今日は浩の家に行こう」

「分かった」

1時間後

ピーンポーン

チャイムが鳴った

有里奈さんかもしれないと思いインターホンを見ると結衣と猛と学がいた

3人を部屋の中に入れた

「んじゃあ、やろっか？」　結衣が聞くと

「そうだな！」と猛は答えた

「え？何すんの？」俺は焦った　だって何も聞かされてないんだから

「今日は『有里奈さん』について調べるんだ。ほら浩も」

学はそう言いながらカバンからパソコンを出した

「そういう事か」俺はパソコンを持ってきて机の上に置いて起動させた

誰もしゃべらないまま1時間ほどが過ぎた

「参加者は全員殺される…までしかどこも載ってないな」

「うーん…」これ以上調べても何も出てこない

「どうする？」俺が聞くと

「お前ら、もし有里奈さんに会っても走れるな？」猛が聞いた

「俺は走れる」「僕は大丈夫」「私は…頑張る！」

「よし！　じゃあお供えに行こう！」「加奈と勇の？」

「当たり前だろ！」

途中にある花屋さんで4人で2つの花束を買った

加奈と勇のところへお供えに行って帰っているとき

「はぁ…もう2人ともいないんだな」俺はボソツと言った

ふと頭を上げると有里奈さんの後姿が見えた

「学と結衣はそこのコンビニ入ったけ！」

俺と猛は走って有里奈さんを追いかけた

第七話（後書き）

東北や北関東の方々大丈夫ですか…？

地震は津波や火事で何もかも壊していくんで地震は嫌いです（；ω；、）

ではー…

第八話（前書き）

お腹空いたんでシュークリーム食べたら
クリーム落ちて泣きそうになった（っつω；）

第八話

俺らは有里奈さんを追いかけた

何故だろう：見つけた瞬間に追いかけなくちゃと思ったのだ

有里奈さんは路地の角を曲がった

こっそり覗くと有里奈さんは止まっている

近くにあった鉄のパイプを持ってゆっくりと近づく

俺はおもいきり鉄パイプを振り下ろした

しかし有里奈さんはバッドで弾きかえした

「……っ！」

俺が持っていた鉄パイプは遠くへ弾き飛んでしまった

その衝撃に俺は尻餅をついた「痛ッ…」

「浩！大丈夫か！？」 猛は叫んだ

また有里奈さんが金属バッドを振り上げている

逃げなければ確実に当たって死ぬ

でも足は震えてるし腰が抜けて動けない

バッドが振り下ろされた

もうダメだ!! 俺は目をつぶった

“ガキンツツ”

「!!」

目を開けると猛が立っていた

猛は自分の鉄パイプで有里奈さんの攻撃を防いでいた

猛が頑張ってくれているのに動けないなんて情けない

また有里奈さんがバッドを振り下ろした

“カランツーー”

さっきのでかなり傷んでいた猛のパイプは折れてしまった

有里奈さんはバッドを振り上げている

今度こそもうダメだと思ったとき

反対側から人の話し声が聞こえた

すると有里奈さんの動きがピタッと止まった

「猛、今だ!」俺らは走り始めた

走って走って…後ろを振り返らずに走って学と結衣がいるコンビニに駆け込んだ

「はぁ…はぁ…」汗がだらだらと流れていく

「大丈夫？」学はハンカチを渡しながら聞いた

「はぁ…殺され…かけた」息が切れて上手く話せない

「もう帰ろう？」結衣が心配そうに言った

俺の家に戻って3人は帰る用意をしていた

「今回分かったことは、俺たち以外の人がいるところでは有里奈さんは俺達を殺せない」

加奈は人通りの無い裏路地で

勇は勇以外誰も居ない部屋で殺された

3人を見送るため俺は外に出た

しばらく4人で話していた

するとあの時とまったく同じ声が聞こえた

「えっ…!?!」

今度は俺だけじゃなく3人にも聞こえていたようだ

俺達は驚いて辺りを見渡すが誰もいない

「有里…奈さん…?」結衣は涙声で言った

「どこにいるんだよ!?!」

有里奈さんが屋根の上で ニタァ と笑っている

なんでそんなところに?!

冷や汗が頬を伝った

第八話（後書き）

また夜に更新するかなー

第九話（前書き）

なんかご飯前に更新できそうだから急いで書くよ！

第九話

「おお！ 浩！！ お前このゲーム持ってたのかよ！」

猛はなんで勝手に人のゲームを探ってるんだよ…

怒る気力もない

今、俺の家には猛と学与結衣が来ている

「なあ！ コレやってもいいか！？」 猛は目をキラキラさせている
まるで新しいおもちゃを見つけた子どもみたい…ってまあそうなん
だけど

「ご自由にどうぞー…」 俺はそう言いながら手をヒラヒラさせた

「プッ、超ダルそう」 学が笑った

ここ最近学が笑わなくて心配したがこの程度で笑うなら大丈夫かな

しばらくして目が覚めた…寝ていたようだ

「お腹空いたあ」 結衣がだだをこねている

「さすが浩の家…何も無いな」 学が台所を探っている

なんでこいつらはこんなに人の家を探るんだ

「ああ：今は何もないぞ」俺は目をこすりながら言った

「どっか食べに行くか？」猛がゲームのコントローラーを握りながら言った

「そうしょっか。でももうだいぶ遅いけど開いてるところある？」

学は時計を見ながら言った

「ならあそこの交差点の近くにあるファミレスはどうだ？ 11時までなら開いてるぞ」

俺が言うと学がタクシーを呼んでくれた

ファミレスに着いた

さすがに夜の10時をすぎると店内はガラガラだ

席に着くとみんなはメニューを広げて決め始めた

みんな決め終わり店員さん呼んで注文を伝えた

しばらくすると各自に注文していた物が来てみんな食べ始めた

今日はコレで終わりだな

良かった 何も起こらなくて

40分ほどしてみんな食べ終わった

お会計は誰が払うかでもめたが結局割り勘だった

結衣がはしゃいでドアを開けた

そこには有里奈さんがいた

結衣は俺達の方を向いていて気づいていない

結衣は俺達が驚いているのに気づき前を見た

「え…？」

「結衣逃げ…ッ」

俺は目を瞑った

“ガスッ”

「キャアアアア…ッ」

鈍い音に続いて結衣の悲鳴が店内に響いた

目を開けると血まみれの猛が結衣をかばうように倒れていった

「お…おい!!! 猛! 大丈夫か!？」

俺は急いで猛のところへ駆け寄った

「…っ…俺は加奈を守れな…かった…それが悔しかったからお前たちは何があっても守るって…決めたんだ…よ」

そう言うとき猛は気絶してしまった

しばらくして救急車が来て猛は病院へと運ばれた

俺達もタクシーに乗って猛が運ばれた病院へと向かった

病院に着くと猛は手術室に運ばれ、待合室で待っていた

待ってる間はただただ願うことしかできなかった

1時間後医者が来た

「…あ、あの! 猛は!？」俺は医者のところへ走って聞いて聞いた

「…後頭部を強く打たれていて…かなりの重体で明日まで持つかも

分からない常態です」

医者は申し訳なさそうな顔をした

「……っそんな…」俺は頭が真っ白になった

「私の…せいで…猛君がぁ…」結衣は泣き出した

学は下を向きながら「もう遅いし…そろそろ帰ろうか猛のお見舞いはまた明日来よう」

「そうだな」俺が言うと結衣はゆっくりと後からついてきた

――― 次の日 ―――

俺は病院の行きしなに花屋で花束を買った

病院に着き、猛のいる病室に行くと学与結衣がもう来ていた

「もう来てたんだ」そういうと俺は猛のところへ駆け寄った

「…ん？」

猛の目がうつすら開いたような気がした

気のせいかと思っていると猛が目を開けた

「猛！」3人は声を合わせて言った

「おお…ごめん…な…わざわざ見舞い…来てもらって」

猛は片手で悪いと謝りながら笑った

「当たり前じゃねえか！だって俺達親友だろ？」俺は学の肩を組んで言った

「そうだよな」

話しているときの猛はいつもの猛と同じだ

これならすぐに退院できそうだな

そう思ったとき

「……っぐ！」急に猛は頭を抱えてもがき始めた

「だ…大丈夫か！？」どうしたらいいのか分からない

頭が混乱してくる

学がナースコールを押すとすぐに医者と看護師が走ってきて

猛は治療室へと運ばれていく

俺達は治療室に入るまで付き添った

「猛…大丈夫かな…？」

「きっと大丈夫だよ。あんなに元気だったんだよ？」

「そうだよな」

30分後医者が出てきた

「猛大丈夫ですよね!？」

大丈夫じゃなかったらなんて考える自分がいた

医者は険しい顔をして言った

「…残念ながら…」

…え？ 嘘だろ？

体の力が一気に抜けて床に崩れた

なんで!？ なんでなんだよ!？

心の中で叫んだ

でも叫んだところで猛が帰ってこないのは分かっている

『…後3人……』

そんな声が聞こえた気がした

第九話（後書き）

ではではご飯食べてきまー

第十話

「はあ…」

俺は1人ため息をついた

昨日猛が死んで残りは俺と学与結衣の3人だけになった

「もうなんなんだよ…」

最初は冗談半分で始めた『かくれんぼ』

見つかった仲間が次々と殺されていく

だんだん分からなくなってきた

なんで死んだはずの有里奈さんがいるんだ？

そもそもなんで有里奈さんに俺達は殺されるんだ？

そんな疑問が次々と頭に浮かぶ

こんなこと考えてなんになるんだよ

それから何も考えずに寝た

「…ハイ！結衣の勝ち！」

ん？

あ、コレ夢なんだ

夢に結衣がたまたま出てきてるだけ…

「いやいやいや、絶対夢じゃないし！」

そういつて俺はスゴイ勢いで飛び起きた

「あ、やっ　と浩起きた」

「浩君おはよー」

「おう、おはよう…じゃなくて

なんでお前ら勝手に人の家に入ってきてトランプしてんだよ！？」

「えー…覚えてないの？浩昨日の夜に合鍵渡してくれたくれたじゃん」

「そうだったけ？」

「昨日の夜」

「お前ら、なんかあったら絶対に電話してこいよ。ってかコレ」

1つずつ鍵を渡した

「浩、コレなんの鍵？」学は手の上の鍵を見て言った

「コレは俺の家の合鍵だ、なんかあったら来い」

「ああ…確かに渡したな」

「でしょ？僕達が変態みたいな勘違いやめてよね…浩じゃないんだからさあ」

学はあきれた顔で言った

「俺が変態ってどういうことだ?!」

「えー間違っていないじゃん」学はわざとらしく言った

結衣と学は爆笑した

俺もそれにつられてだんだんと笑いがこみ上げてきて3人でおもしろい
つきり笑っていた

こんなに笑ったのはすごく久しぶりの気がする

かくれんぼをやる前と一緒だ

でも違うところは

加奈・勇・猛がいないだけ

「…はあ…笑いすぎて疲れたあ」結衣が言った

「今日はどうするんだ？」俺は学の方を見た

「どうしよっかなー…あんまり外に出ても危ないだけだし」

「最近浩の家ばっかだし僕の家に来る？」学は言った

「んー…まあ、家の中だしそれに学の家は安全だしな」

学の親は有名企業の社長で家がすごく大きい

だからその分セキリティーも完璧なのである

そんなわけで今日は学の家に行った

学の家でしばらく遊んだり喋ったりしていた

俺はかばんを見ると携帯を忘れたことに気がついた

「あ、しまった」

「ん？浩どうかしたの？」学が聞いてきた

「ああ…忘れ物してきたからちよつと取りに帰る」

そう言っただ俺は急いで家に帰った

俺の家は学の家とそんなに遠くない

走って近道を通ると5分もかからない

まあ、タクシー呼ぶほどじゃないな

そう思って家まで走った

しばらく走って立ち止まった

「くっそ…忘れてた…」

ここ最近この道は工事中で通行禁止だったのだ

俺は別の道で行くことにした

結局家に着いたのは学の家を出てから10分近くたった頃だった

走って来たのでだいぶ疲れた

お茶を飲んでからベッドの上に置いてあった携帯を見ると

新着メールが11通も着ていた

「…え？」

見ると全部学からだった

内容は全て一緒

【浩、早く来て】

なにかあったのか

まさか：有里奈さん

嫌な予感しかない 俺は急いだ

もし有里奈さんだったら：

そう思うとっさきの疲れが無くなりスピードが上がった

回り道をしていたら間に合わないかもしれない

俺は近道の方へと向かった

工事をしている人たちを押しのかトラックの間を駆け抜けた

学の家の前に着いてインターホンを押した

“ピンポーン”

しばらくしてもだれも出てこない

「なんでだよっ！」

また押してみるがやっぱり誰も出てこない

まさか

なんだか怖くなってきた

もし学与結衣が中で死んでいたら…

第十一話（前書き）

卒業式出なあかんとかあああ r y（ ㇿ ）

まじで旅立ちの日はあかんて！
泣いてまうがな！！

そんなわけで第十一話

第十一話

なんで…なんで出ないんだ…

メールを送ったが返事がこない

学も結衣も

「おい！ 居るんだろ！？ 学、結衣！ 返事しろよ！」

大声で叫んでみるが返事はない

「返事してくれよ…死んでなんかいないよなあ…？」

5分ほど経ったとき後ろから声がした

「…あら…浩くん？ どうしたの」

学のお母さんだった

学が死んでるかもしれない

なんて絶対に言える訳ない

「あ、いや、ちょっと急ぎの用があって…でも学寝てるっぽいんですよ」

そう言うと「あらそうなの、ちょっと待ってね」

学のお母さんは玄関を開けてくれた

俺は急いで階段をかけ上がり学の部屋のドアを開けた

しかしそこには誰も居なかった

「……………!？」

床には小さな子どもの足跡が付いていて

白いじゅうたんには赤黒い、何かを引きずったかのような跡が残っていた

俺は一瞬でそれが有里奈さんだと気づいた

有里奈さんがここに来たってことは…

でもまだ死んだとは決まっていない。

生きている可能性だってあるんだから。

俺は部屋中を探し回った。

ベッドの中、ベランダ、タンス

クローゼット開けるとそこには…

第十一話（後書き）

なんて焦らしかたを試してみたり（

なんかちょっとやってみたかったです

許すんだ！！↑

第十二話

クローゼットの中は制服や上着などがかかっていた

「……………」

ガサガサと小さく物音がして

「…怖いよ…」

「大丈夫…静かに…」

ひそひそと聞こえる小さな声

「ま、学…？」

「え？」

「学？ 結衣?! いるのか？」

「こ、浩くん！」

目を真っ赤にした結衣が飛び出してきた

「なんで…こんなところに隠れて…」

「有里奈さんが来たんだ」

「あっ…」

そういや部屋のじゅうたんに…

「どうやって有里奈さんが来たのか教えてくれないか」

「うん。いいよ」

そう言って学は話し始めた

俺が学の家を出て5分ほどしたときに

どこからか分からないが

有里奈さんの笑い声が聞こえてきた

それで慌てて俺にメールしたらしい

でもしばらくして笑い声は止まったから

安心していたら

階段のほうから

ペタ ペタ という足音と

カランッ カランッ と金属が何かにぶつかる音がした

学たちはそれが誰なのか気づいて

クローゼットに隠れた

足音はゆっくりゆっくりと階段を上って部屋に近づいて

ついに部屋のドアが開いた

足音の主は部屋中を歩き回ったようだった

そして隠れている場所…クローゼットの近くで足音は止まって

クスクスと笑うのが聞こえた

そして

コンコンコンとクローゼットの扉を3回ノックして

それから少しの間があって

クローゼットの扉が開けられた

「それが浩くんだった…」

「そう…もう死んだって思ったね」

俺が部屋に入るすぐ前まで有里奈さんは部屋にいたんだな…

床に残った黒い小さな足跡を眺めて思った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7952o/>

みいーつけた・・・

2011年10月9日19時08分発行